

## 研究ノート

『ユタ日報』創設者・寺澤畊夫の  
ライフヒストリーの研究序論

東元春夫

## 要旨

『ユタ日報』は1914年に米国ユタ州ソルトレークシティで寺澤畊夫（てらさわ・うねお）によって創刊された日本語新聞である。この小論では、同新聞社に残された資料をもとに寺澤畊夫のライフヒストリー的研究を試みることにより示唆される社会学的意味を探ることを目的とする。具体的には寺澤畊夫の米国到着からユタ日報創設までの期間に限定して、彼の足跡を辿ったが、日本人コミュニティの基盤となる日本人会、仏教会および日本語新聞の創設の功績が大であった一方、故郷に帰って政治家になる夢の実現のためベンチャービジネスへの意欲も高かった事実が浮かび上がった。

キーワード ユタ日報、寺澤畊夫、ライフヒストリー、移民、在米日系人

## I はじめに

ユタ州を初めて訪れた日本人は日本政府の使節団、岩倉具視一行で1872年2月4日のことである。民間人では「醜業婦」が1890年前後に同地を徘徊、また労働者もこの頃から入ってくるが、本格的に流入するのは1900年代に入ってからである。<sup>1)</sup>

ちなみにユタが45番目の州としてアメリカ合衆国に加盟するのが1896年である。日本人の流入が始まった1890年を「原点」とすると、ほぼ25年ごとに『ユタ日報』にとっての「節目」を迎えていることは興味深い。

すなわち25年後の1914年に『ユタ日報』が創刊されるが、これは日本人コミュニティ全体から見ると「单身」の「出稼ぎ」的労働から「家族」を

伴った「定住」への変容の時期と解釈される。既にこの時期には「日本人町」がソルトレークシティの中心部に形成されており（東元：1995）、日本人コミュニティの発展期（展開期）と考えられる。国際的にも第一次世界大戦の時期であったため、米国国内でも労働力が不足し、移民労働の需要が高かった。『ユタ日報』の創刊号（1914. 11. 3.）には、戦争のため東京から輸入した活字の延着により創刊が遅れた事情が述べられている。

その25年後である1939年に寺澤畊夫が死亡。その年に同紙の英語ページがスタートする。この時期は二世が成長し成人に達する者も出てきて、その結果英語メディアの需要が次第に高まっていっ

1) この項、詳細については東元春夫（1994）「ソルトレークシティー日本人町の消滅-社会学的一考察」『芦屋大学論叢』創刊30周年記念号II, pp. 1-24.

たと解釈できる。その2年後に太平洋戦争が始まり、『ユタ日報』は一時的に発行停止を命じられるが、やがて米国政府と強制収容所に入れられた日系人とのパイプ役として、発行を許された。この時期に同紙は各地の収容所に郵送され、その発行部数は1万部を越えていた。

日米開戦から25年後の1966年、ソルトレークシティの日本人町が解体され、「第二の強制立ち退き」が起こる。このときにはユタ日報社自体も移動を余儀なくされ現在の社屋へ移っている。これは公民権運動のうねりが全世界を包んだ時期であり、日系人の社会的地位の上昇が始まる時期とも解釈される。この1966年の日本人町の解体は、強制的ではあるが白人居住区への分散を意味し、両サイドともその意志にかかわらず事実上、同化を促進させた。一般論として、マイノリティ・グループは都市の中心部に集中的に居住する傾向があり（バー・他：1979）、ロサンゼルス黒人居住区や韓国系居住区など、各地にその典型が見られる。

さらにその25年後の1991年、畊夫の妻、國子（くにこ）が亡くなり『ユタ日報』が77年の歴史に幕を下ろす。國子が亡くなる3年前の1988年に

は当時のレーガン大統領が日系人の戦時強制収容に対する補償法案に署名。さらに今年（2000年）になってアジア系として初めてノーマン・ミネタが政府閣僚（商務長官）に就任した。これは米国行政の最高レベルまで「構造的同化」が進んだという象徴的な出来事である。これまで地方自治体などでの司法・立法・行政で日系人の進出は見られていたが、文化的同化やインターマリッジなどの同化理論の諸相の中でも「構造的同化」が最終的なものであるという意味で画期的といえる。<sup>2)</sup>

この1991年の『ユタ日報』の廃刊は、一般に移民新聞の皮肉な運命を物語る。すなわち、「移民新聞にとっては、同化の推進こそが究極の達成目標であった。とすると、移民新聞の成否は、ある意味で、自らの足元を切り崩す能力をもつかどうかによって計ることができたのである。」（ジャノウィッツ：1967）この仮説は多くのヨーロッパ系の移民新聞によってサポートされてきたが、『ユタ日報』においてもまさにこれが当てはまるのである（東元：1984a;1984b）。そしてこの廃刊とともに移民としての日系集団の「同化のサイクル」が一巡したと解釈できる。

## II 研究の位置づけと方法

筆者はこれまで、主として質問紙調査により収集したデータに基づいて在米日系人の社会的同化をさまざまな角度から研究してきた。1983年と1993年にユタ州全域とロサンゼルス郡の日系人を対象とした調査がその中核となっている。それは従来の「理論的背景から導かれた仮説を統計的

データにより検証する」というスタイルを踏襲したものである。その一方で、中野（1981）が指摘するように、「性別・年齢別・階層別・職業別といった集団化を急ぎ、そのような観点からの説明への早あがりのなかで、個性をもったままの諸個人をとらえそこなってきたこと」も否定できない。

2) 同化理論については、Gordon, Milton M. *Assimilation in American Life*. Oxford University Press. 1964.（邦訳：倉田和四生・山本剛郎 訳編『アメリカンライフにおける同化理論の諸相』2000年晃洋書房）、また日系人のインターマリッジについては、東元春夫（1996）「在米日系人のインターマリッジ—ユタ州での調査から—」『移民研究年報』第2号 pp. 65-88. を参照。

表1. 寺澤畊夫と『ユタ日報』略史（事実と言説）

- 1872.2.4. 岩倉具視一行（日本出発時107名）がユタ州を訪れる（現地新聞・他より）。
- 1881.3.11. 畊夫誕生：長野県下伊那郡山吹村679番地口号。父・興太郎（きょうたろう）、母・佐野の長男（戸籍  
膳本=以下「戸籍」と略す=より）
- 1894.8.1. 日清戦争（13歳）
- 1896.7.8. 國子誕生：長野県下伊那郡飯田町甲1373番地。父・金太郎、母・「きう」の次女（戸籍より）（この年、  
ユタが米国45番目の州として合衆国に加盟）
1903. 郡書記（22歳）（追悼文=原稿および紙面より）
- 1904.2.10. 日露戦争（22歳）（1905.5.27-28.日本海海戦 1905.9.5.日露講和条約調印）
1905. 畊夫渡米（『山中部と日本人』より。畊夫の「発状控」では「3月2日桑港着」）（23歳）
- 1906.4.18. サンフランシスコで地震と大火
- 1907.11.16-1908.2.18 7回の覚書交換による日米紳士協約（日本側の自主規制約束）
1907. ユタ州初の日本語新聞『絡機時報』創刊（オグデンにて飯田三郎）
1908. 『絡機時報』ソルトレークシティで再刊（飯田三郎の弟四郎による）
1909. 畊夫ソルトレークシティへ移動（『山中部と日本人』より。畊夫の郵便物で確認）（28歳）
1910. 同胞農家パイオニアとしてソルトレークシティ郊外の野菜園で約3年間経営。  
「ユタセロリ」の開発者として「百姓寺澤」と称される（紙面より）。
1911. 日韓併合
- 1914.7.28. 第一次世界大戦（33歳）
- 1914.11.3. 『ユタ日報』創刊（紙面より）（33歳）
- 1919.1.10-14. 在米日本人会定期代表者会に「ユタ州日本人会代表者」として出席（38歳）（議事録より）
- 1921.12.21. 國子と結婚（入籍）（旧姓村松。戸籍名は國）（戸籍より）（40歳）（國子25歳）
- 1926.8. 長女・和子誕生（戸籍より）（45歳）
- 1927.9.25. 『絡機時報』を吸収合併（紙面より）（46歳）
- 1932.5.28. 次女・治子誕生（戸籍より）（51歳）
- 1937.7.7. 蘆溝橋事件（日中戦争始まる）（56歳）
- 1939.4.24. 畊夫没（56歳）（紙面および戸籍より）（國子42歳、和子12歳、治子6歳）
- 1939.9.1. 英語ページを新設（紙面より）
- 1941.12.7. 真珠湾攻撃により太平洋戦争始まる。翌年2月まで発行中断（紙面より）
1966. ソルトレークシティの日本人町解体（4月～5月強制退去）（後藤武男「公共のためには」『文芸春秋』  
1996年11月号 pp. 87-89.）（國子69歳）
- 1991.8.2. 寺澤國子没（94歳）（他紙紙面および葬儀次第より）  
（1998年4月東元春夫作成：2000年9月修正）

ライフヒストリーの主流である「口述」による方法は、本人が1939年に死去していることから不可能であるが、ここでは残された手紙や写真その他のドキュメントにより、「歴史的現実の再構成」（中野：1995）を試みる。ユタ日報社に保存されている資料を整理するプロセスでは、「歴史研究の門外漢としての社会学者」に何が出来るか不安に陥ったが、「社会学は方法の科学（方法論に独特の特徴をもつ科学）であるから、研究対象についていえば、社会学者はそこに社会現象があるかぎり、それがいかなるものであろうとも、貪欲に研究対象とする」という河西宏祐（1992）に習う

ことにした。

筆者の研究とのかかわりにおいては、谷（1996）が「ライフ・ヒストリー法の共通理解」として挙げている10項目のうち、次の4点が特に重要である。

(1) ライフ・ヒストリー法は、異文化を対象とし、それを人間行動の動機に遡って内面から理解しようとするとき、より効果を発揮する。

(2) ライフ・ヒストリー法は、個人のみならず、マクロな組織、制度、システムも視野に入れ、個人史と社会史、主観的世界と客観的世界、これらの連動関係を把握しようとする。

(3) データとしてのライフ・ヒストリーには代表性や客観性が欠けるとの批判があるけれども、個別を通して普遍にいたることは可能であり、個性記述の蓄積を通して類型構成への道が開かれている。

(4) ライフ・ヒストリーなどの質的データと量的=統計的データとの相互補完によって、より豊かな研究成果を生み出すことができる。

このラインを視野に入れつつ在米日系人の研究を進めたのが、「ソルトレークシティ日本人町の消滅」、「戦時強制収容と構造的同化」、「1916年のユタ州日系コミュニティ」、「在米日系人のインターマリッジ」(東元：1994;1995a;1995b;1996)であった。いずれも全面的にライフ・ヒストリー的アプローチをとるものではないが、少なくとも部分的にはその手法を取り入れることにより、「個

人というフィールド」を意識した試みである。

なおライフ・ヒストリーの手法を使った最近の研究として、東京経済大学の研究グループによるハワイ日系人二世に関する調査報告がある(山中、山田、ロス：2000)。この「資料」は、そのシステムティックな調査方法のみならず、CD-ROM化により音声および映像をも含めて提供されているという点で特筆に値する。

ここでは「個人」寺澤畊夫という「フィールド」を中心に、渡米からユタ州定住までのプロセスをライフ・ヒストリー的アプローチにより吟味する。それによって「個人」および日系コミュニティという「集団」の関係とそれを取り巻く当時のアメリカ「社会」に関する理解を深めようとする試みである。

### III 資料紹介と考察

1. 日本出発前 この小論のスコップからは外れるが、全体像を明らかにするために渡米前の寺澤畊夫の事情を把握しておく必要がある。

1.1. 新聞記事より 畊夫死亡時に『ユタ日報』(1939.5.10.)に掲載された「故社長略歴」によると、1881年3月11日長野県下伊那郡山吹村の「名家」の父、興太郎(きょうたろう)と、母佐野(さの)の長男として誕生。父は「村治に携って功あり、且つ教育家として誉れ高く文部省より褒賞の沙汰あり」。(畊夫は)

年少時より既に進取の氣象先覚者を凌ぐ風あり、先ず中学敷地問題の紛々たる銅臭を排し、正義の言論を吐き、郷党青年の首領として大に言論界を開拓し、青春22歳郡書記の重職を拝命し早くも公人生活に入る

時しも新日本興国に際し養蚕、新産業、其

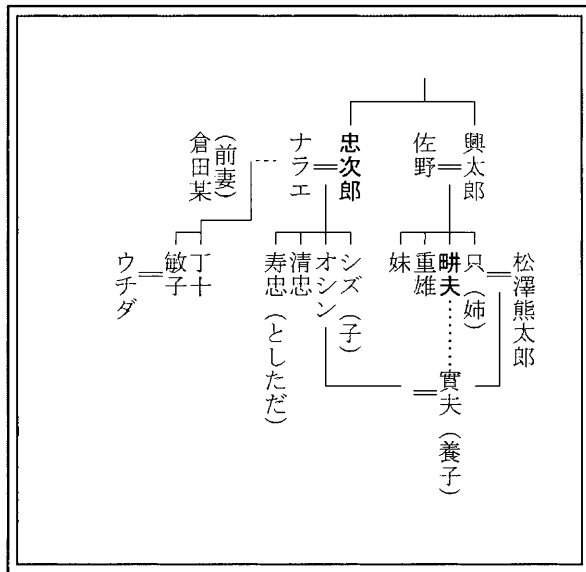
他実業大発展に際し、私財を投じ公益を擴められたる厳父は、為に巨万の負債整理の逆境に立つ、畊夫君は父を助けて苦難を切り抜くために努力し、やがて氏が生涯を通じての奮闘的生活の門出をなしたるか。

寺澤氏は明治38年4月寺澤家の家運を北米の天地に開拓せんと決心渡米す。

1.2. 戸籍と聞き取り調査により 筆者が入手した「戸籍」等により、畊夫を中心とする寺澤家の親族関係を示したのが、図1である。

さらに生存する親族からの聞き取り調査によれば、渡米前に畊夫は奈良県在住の叔父、忠次郎に相談に行っている。当時小学校の校長をしていた忠次郎は「叔父が先に渡米すべき」と考え、本人より先に渡米したという。1911年帰国し、10年間の在米生活をもとに『亜米利加土産』(1912)を

図1 寺澤畠夫と叔父・忠次郎  
(親族関係図)



(1998年4月東元春夫作成：2000年9月修正)

著している。<sup>3)</sup>

2. カリフォルニアでの足跡 渡米後の足跡については不明な部分が多い。娘の和子と治子によれば母親(國子)から畠夫が日本からまずシアトルに着いたことを聞いているが、発見された記録としては畠夫の「発状控」による「1905年3月2日桑港(筆者注、サンフランシスコ)着」だけである。

2.1. 郵便物により この「発状控」は自分の発信した手紙の写しである。当時日米間は船で18日ほどかかるため、手紙が往復するのに最低で40日を要したと推定される。そのため、日米間で頻繁に手紙を送受する畠夫などにとっては、いつ誰にどのような内容の手紙を送ったかを記録し

3) 忠次郎および親族関係についての補足

(注1) 忠次郎は前妻(倉田家の娘)との間に丁十(ていじゅう・男子)と敏子が生まれた。敏子は岡山県人のウチダ家に嫁ぎサンフランシスコに住んでいた。映画監督で有名なトム・ウチダと親戚関係になる。

(注2) オシンは1998年長野県下伊那郡高森町山吹で死去(100歳)

(上記2項目とも畠夫の従兄弟の寿忠氏とのインタビューより。1998.3.31.)

(注3) 戸籍によれば畠夫の姉の只(ただ)は小池家に嫁ぎ離婚後、松澤熊太郎と結婚・・・「只は朝鮮へ嫁ぎそこで子供を産んだ」(畠夫の従兄弟の寿忠氏とのインタビューより。1998.3.31.)

(注4) 戸籍によれば畠夫は1921年に國(くに)と結婚する前の1917年に実姉、只(ただ)の長男である實夫を養子にしている。・・・「寺澤家の跡取りをしたくないので養子を迎えて自分の代わりに跡取りにしようとした」(畠夫の従兄弟の寿忠氏とのインタビューより。1998.3.31.)

(注5) ナラエが亡くなってから3歳上の清忠(1916年生まれ)はオシンに預けられ、寿忠はシズ(子)に預けられた。次女のシズ(子)は48歳で没。清忠は今宮工業の二部で溶接を学び、大阪鉄工所に定年まで勤める(現在、大阪市在)。寿忠は1919年生まれ。中学卒業後、通信関係の仕事につき、学校で教えたが、その後退職して新宮へ移り、長く寺沢塾を経営。現在は寺沢塾をやめたが、現役の塾の教師(新宮市在住)。1982.9.-1987.5. 留学(当初異母姉の敏子を頼ってサンフランシスコ州立大学の語学学校。その後1983.5. オハイオ州アシュランド・カレッジへ移籍)(畠夫の従兄弟の寿忠氏とのインタビューより。1998.3.31.)

(注6) 畠夫の長女和子によれば、畠夫は渡米前忠次郎に相談したところ、叔父が先に渡米すべきと考え、本人より先に渡米した。・・・忠次郎は慶応2年(1866)10月生まれ。長野県師範学校を明治16年(1883)7月に卒業(18歳)。同校で第1回の小学校教員免許を取得。卒業後すぐ長野県で校長になった。当時は正式教員がめざらしく正式の免許があれば若くても校長になれたという。その後奈良県北葛城郡の新庄小学校の校長をしていた。ナラエの実家の村野家は昔、その城主の家老をしており、平民の忠次郎が結婚を申し込んだときは「どこの馬の骨かわからぬ者へ娘を嫁にはやれぬ」と一度は断られた。その後、村野家が長野へ調べに行って結婚が許可されたという。ちなみに昔は山吹村で「北」といえば寺澤家、「西」といえば倉田家で、自宅から他人の敷地を通らずに駅まで行けたらしい(注、この1文に関しては寺澤和子からも同様の発言あり)。いずれにせよ、忠次郎は17年間校長をしていたが、畠夫が渡米の相談に奈良まで来た時、急に自分も行きたくなったらしく、校長をやめ妻子を残して急に渡米したらしい。妻のナラエも行きたかったらしいが、これから横浜を出発するという知らせを突然聞いたという。(畠夫の従兄弟の寿忠氏とのインタビューより。1998.3.31.)

(注7) ソルトレークシティの畠夫の墓碑の日本語は寿忠が書いた(畠夫の従兄弟の寿忠氏とのインタビューより=1998.3.31. 寺澤和子に確認=1999.2.7.)

図2 郵便物(手紙・葉書)に見る寺澤畊夫の足跡

(1998年4月東元春夫作成:2000年9月修正)

(place)	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913
San Francisco	123456789OND	123456789OND	123456789OND	123456789OND	123456789OND	123456789OND	123456789OND	123456789OND	123456789OND
Oakland		8*	3**		2-----5				
Fresno	5-----								5 (mails)
Tulare					D-----8 (mails)				
Fillmore	6-----								O (Uneo's notebook)
Los Angeles (no mails)		8-----							1 (mails)
Stine, Nevada						4 --7 (3 mails)			
Frisco, Utah				4-----		7 (mails)			
Salt Lake City							N-----		
P.O.Box 294							N-----		9
4701 South 11th East							3-----		D
#34 Richard Street, Rt 294									7

\* 8/14/05 Addressed to: c/o Mr. C. Terasawa 59 Minna St. San Francisco; Corrected to read: Kamikawa Hotel #1538 Kern St, Fresno

\*\* 3/22/06 Rec'd: c/o Mr. C. Terasawa. 839 Sacramento St. San Francisco

(参考1)

畊夫は1912年当時 Garden Grower として(寺澤農園)ソルトレークシティの郊外(南)210E 12th South にいたが、P. O. Box 1168 も郵便物の受信に使っていた。この P. O. Box は絡機時報(Rocky Mountain Times)の所有である。

(1910年2月21日着信の年賀状には「米国ユタ州ソートレーキ、ロッキー時報社内寺澤畊夫殿」とある)

(参考2)

葉書: 2/1/11 (発信) 2月2日午後7時から評議員会 議題: サンフランシスコから帰った有馬氏の報告

葉書: 2/17/11 (発信) 2月19日(日)午後8時から日本人会事務所で評議員会

葉書: 1/10/12 (発信) 「明けましてお目出度う。来る十四日、日曜に千代田旅館に於て?三回例会を催しますから同好御誘の上御出席に成り度御案内申上ます。正月の事とて特に今回は午後一時より歌骨牌??等用意致して待ちうけ居ります同好の方はお遠?に及ばず御手なみを示しなされ度午後七時より例会開会幹事の苦心になる面白いプログラムで?を落とすと落さぬは諸君のお?手、(以下不明) 四十五年一月十日 在温倶楽部当幹事」

(注、?は解説不明の箇所を示す)

葉書: 5/13/12 (発信) 在温倶楽部発起人会「拜啓兼テ御意ヲ得置候在温倶楽部常設場ノ儀愈ヨ千代田旅館内第四号室ニ決定仕候間一角後御内暇ノ際ハ

御来遊被下度此段御通知旁々御案内申上候也 五月十三日 発起人」

葉書: 7/5/12 (発信) 7月7日午後1時から日本人会事務所で評議員会

葉書: 7/19/12 (発信) 7月27日午後7時から千代田旅館で総会

葉書: 7/31/12 カリフォルニア州フレソノ発「富樫喜一儀急性腹膜炎にて薬石効なく本日午前参時貳拾分死去仕候間此段御知らせ申上候 敬白

七月参拾壹日 妻 富樫美輪「布市」(手書き) 組合教会 追て葬送は来る八月一日午后三時組合教会にて執行可仕候

「寺澤日本人会幹事」(手書き) 殿

葉書: 8/7/12 (発信) 「当会定期役員会ヲ来ル十一日(日曜)午後一時ヨリ開催致候間御出席被下度此段及御通知候也 大正元年八月七日 ユタ州日本人会」

葉書: 10/11/12 (発信) 日本人会より畊夫宛(宛先: 210 E 12th S St. POBox 1564)「来ル13日(日曜)午後1時ヨリ定期役員会開催仕?ニ付御出席?下度?也」

(ユタ州日本人会)

葉書: 5/22/13 (発信) 5月25日(日)午後2時から特別委員会開催の連絡

(参考3)

1918年3月8日発、北海道北見中頓別、岩田猛五郎氏からの郵便物は米国での検閲の跡があるが、宛先として「亜米利加エムデイ鑛山株式会社社長兼総支配人大和土地物産株式会社副社長兼取締役 ユタ日報社長 寺澤畊夫殿」とある。 以上

た、明治版「通信ログ」として機能していたと考えられる。

この「発信記録」と届いた郵便物の「受信記録」、すなわちユタ日報社に残されていた手紙や葉書をもとに、畝夫の足跡を辿ったのが、図2である。これは郵便物の受信記録（宛名と消印）により「場所」と「時期」を集計したものであり、必ずしもその「時期」にその「場所」にいたことを示すものではない。カリフォルニア州でも複数の場所で受信していることから、その場所を往復していたのか、あるいは主として一箇所に留まり、時々他の場所を訪れていたのかは不明である。図2のサンフランシスコでの住所で“c/o Mr. C. Terasawa”となっているのが、叔父の「忠次郎」と推察される。

なお「受信郵便物」の多くとこの「発状控」は「くずした字」で書かれているため解読が困難である。これらの「内容分析」が進めばさらに「足跡」やその他の事情が解明されよう。

2.2. 名刺等により 『ユタ日報』の社屋から次の2枚の名刺が見つかった。ひとつは“U. TERASAWA GENERAL LABOR CONTRACTOR K STREET TULARE, CAL”であり、電話番号欄は空白になっている。もう一つは

“JAPANESE AMERICAN REALTY INVESTMENT COMPANY/ JAPANESE LABOR CONTRACTORS 1541 KERN STREET FRESNO, CALIFORNIA TEL. CHINA 571”日本語で左端に縦書きで「日米農業合資会社」とある。これは個人名が書かれていないので、会社で共有した名刺と考えられる。この2種類の名刺を前述の図2と併せて考えると、カリフォルニア州テュレアで郵便物を受け取っている1907年12月から翌年8月の期間は同地域で労働請負の仕事をしていたものと推察される。

2.3. 「手帳」により なおこれを補足する資料として1909年に布市（筆者注、フレスノ）神川兄弟銀行・神川兄弟商会の「懐中便覧」がある。これは、労働請負人のハンドブックのようなもので、「労働タイムブック」のページには同年4月などの自分自身を含む「労働者」リストと労働の記録が書かれている。したがってまだこの時期にはカリフォルニア州中部を活動の本拠とし、その後ユタ州に移動したと推察される。

### 3. カリフォルニアからユタへ

3.1. 「一攫千金」を夢見て 前述の「故社長略歴」によると、渡米後「直ちに中部加州（筆者注、カリフォルニア州）の農事に携はり」、「1909年8月羅府（筆者注、ロサンゼルス）よりソートレーキ市に入る」との記述である。この「農事に携はり」とは「現実に農場労働を行った」のか、あるいは「労働請負の仕事だけを行った」のか解明を要するが、フレスノでの「懐中便覧」のメモから推察すると寺澤自身も何らかの労働に従事していたのであろう。ロサンゼルスでの郵便物の受信の記録はない。地図の上ではフィルモアが比較的ロサンゼルスに近いので、上記「略歴」の筆者が「ロサンゼルス近郊」という意味で用いたのかもしれない。さらにこの「便覧」メモ欄の最後の方に、「ユタ州オグデン市」の住所の記載がある。この時点で、少なくとも同市のだれかと連絡をとっていた可能性もある。

3.2. 銀山での1年 図2が示すように、1908年4月から翌年7月までユタ州プリスコでの郵便受信の記録がある。プリスコはユタ州南部ビーバー郡の砂漠地帯に位置し（図3参照）、今ではいわゆる「ゴースト・タウン」のひとつである。その町は1870年代半ばに銀の発見により人々を引きつけ、1880年から85年ごろには6000人が居

図3 畊夫の足跡・略図



住していたが、1885年に鉱山の陥没事故をきっかけに人口が急減、1920年までには居住者がいなくなった（カー：1972）。寺澤畊夫が郵便物を現地で受信していた時期は、この陥没事故から20年以上が経過しているが、それでも1885年から1913年の間に2,000億ドルの産出力があった（カー：1972）。寺澤がここでどのような活動を行っていたかは不明であるが、後になって起こす「エムデー鉱山株式会社」（ネバダ州）やワイオミング州での油田採掘などのベンチャービジネスへの布石とも解釈可能である。

#### 4. ユタへ到着

4.1. 「百姓寺澤」 何が彼を「ユタ」の地へ導いたのか。現在のところそれを示す資料は見つ

かっていない。唯一の手がかりは前述したフレズノでの「懐中便覧」に書かれたオグデン市の住所である。「故社長略歴」には次のように書かれている。

全年（筆者注、1909年）11月3日明治大帝天長の佳晨に際し、初めて塩湖同胞を代表して祝賀を述べられしが氏が山中部に於ける公人生活実に30ヶ年の1頁に該当す

1910年同胞農家パイオニヤ一の一人として塩湖市郊外野菜園に入り其所に氏が全生涯を飾る奮闘努力の歴史は展開す 又農務多忙中新世界支社の煩務を擔当し後年一新聞社の長としての実務を習得さる

是等の劇務にも屈せず氏独特の進取的研究は一日も忽がせにせず、秘密とせるセロリ栽培法を採知し是とグリンタップ種と花粉交合による新種を發明し且つ其貯蔵法を考案し是を私せず独り同胞間のみならず普く米国々産を増進する等。直接農事経営は三ヶ年の短期なりしも氏が熟達と老練は能く此大功を樹て、時人呼んで百姓寺澤と称するに至る。<sup>4)</sup>

郵便物からはソルトレークシティよりかなり南に位置する住所“4701 South 11th East”で1910年3月から同年12月までの期間の記録があるが、同時に同年2月21日着信の年賀状には「ロッキー時報社内寺澤畊夫殿」と記されている。また日本の私書箱に当たる P.O.Box での受信の記録が1909年11月から1911年9月までである。これは都心の郵便局で郵便物を受け取っていたことを意味する。したがってこの時期は市の南方で農園を営みながら市の中心部とも行き来して、後述する新聞社関連の仕事や日本人会など政治的活動をしてい

4) この記事の原稿と思われる「寺沢氏葬式順」（著者不明。ユタ日報社屋で発見）には、セロリについて「当時支那人のみ秘密とせるセロリー栽培法」とある。



図4 1910年頃の絡機時報社（写真）  
（右から2人目が寺澤畊夫、左から2人目が飯田四郎）



たのであろう。

4.2. 『絡機時報』へ居候 このように農業をしながら「新世界通信員」をしていたことは1924年『絡機時報』（ろっきー・じほう）発行の『山中部と日本人』にも書かれている。「新世界」とは当時サンフランシスコで発行されていた日本語新聞であるが、寺澤がこの新聞と関わっていたことは発掘された他の資料からも明らかである。これについては別稿において触れたい。また『絡機時報』社屋前での記念撮影（図4）に同紙社長の飯田四郎らと写っている日本人9名の中に寺澤の姿がある。これらの資料が示すのは少なくとも「1909年にソルトレークシティへ移動して直ちに新聞社関連の仕事をはじめた」ということであ

る。カリフォルニア時代から既に『新世界』と何らかの関係をもっていたとも考えられるが、あくまで推測の域を出ない。

4.3. 日本人会との関わり 前述の「故社長略歴」が示すように、1909年8月にユタに移って直ちに現地の日本人組織と接触し、早くも11月3日には「明治大帝天長の佳辰に際し、初めて塩湖同胞を代表して祝賀を述べ」ている。さらに発見された郵便物から日本人会の「評議員会」や「役員会」の案内が多く見られる。後年になるが、1919年にはユタ州日本人会の「代表」としてサンフランシスコで開催された「在米日本人会定期代表者会」に出席、<sup>5)</sup> また死亡時の1939年には「ユタ州日本人会」の「公告」には「本会会長兼幹事」

5) 大正8年1月（1919年）在米日本人会「在米日本人会大正8年度定期代表者会議事録」より。

とある。<sup>6)</sup>

4.4. 仏教会との関わり 「塩湖仏教会」は1912年、市内の「九州屋旅館」内のホールを「仏教会」として使用したことに始まるが、その発足時の10名の中に「寺澤畠夫」の名がある。<sup>7)</sup> さらに1924年の仏教会着工時には「ユタ日報のテラサワ・ウネオ」が借入金の保証人として署名したと同教会75周年の英文ブックレットに記されている。<sup>8)</sup>

畠夫の死後、53年間『ユタ日報』の発行を続けた夫人の國子が生前筆者に語ったところでは、同

地で『絡機時報』(1907年創刊)がキリスト教系であったのに対抗して、仏教系の新聞としてスタートしたのが『ユタ日報』である。

4.5. 『ユタ日報』設立準備(活字購入) 1914年9月付けで「株式会社東京築地活版製造所」から「寺澤畠夫」に届いた「勘定書」によると、合計額704,080円、「内御入金」300,000円、「差引」404,080円が請求されている。これには「荷造費」、「運賃」、「諸経費」以外に「保険料(戦時保険を含む)」や「領事手数料」などが含まれ、当時の時代背景を反映している。

#### Ⅳ おわりに

寺澤の娘で現在ソルトレークシティに在住の和子と治子が筆者に語ったところによると、畠夫は故郷に帰って政治家になるのが夢であったと母親の國子からよく聞かされていたという。この「夢」を検証することはできないが、発見された資料から畠夫の「政治的活動」の事実はかなりの程度明らかになった。

ユタ日系社会のパイオニアとして彼の功績は大である。それはコミュニティの基盤である「日本人会」、「仏教会」、そして「新聞」設立への貢献である。これらはコミュニティのメンバーの社会的相互作用の場として重要であるが、その一方でそれを彼の政治的野心を実現するための「装置」と解釈することはできないだろうか。当時唯一のマスメディアであった「新聞」の影響力を彼は十分に理解しており、それを彼の「政治的活動」にうまく利用したのかもしれない。

「明治版ベンチャービジネス」ともいえる彼の志向は新聞だけに留まらず、前述したように鉱山や油田への投資にも向いた。米国社会で起業家として成功するために英語は必須である。弁護士や銀行などホスト社会とのコミュニケーションができなければ何もできない。寺澤が副社長を務めた「エムデー鉱山株式会社」設立の事実や発見された他の多くの契約書等が、かれの「英語力」を物語る。時期を特定できないが、彼の名前が書かれた「英語の練習帳」のようなものが数冊発見された。現在の日本にあてはめると「中学から高校レベル」の英文をノートに書き、それに訳語が付されている。独学なのか誰かに教わったのか不明であるが、渡米後彼が英語習得に努力した証拠として貴重である。

1934年発行の運転免許証には「身長：5フィート2インチ(157.5センチ) 体重：122ポンド(約

6) 『ユタ日報』1939年4月24日

7) 塩湖仏教会 1962「慶讃新築落成創立五十周年先亡者追悼感謝法要」(冊子)

8) Salt Lake Buddhist Church. SALT LAKE BUDDHIST TEMPLE 75TH ANNIVERSARY: NOVEMBER 14, 1987 (booklet)

55キロ) 年齢: 52歳 (1934年3月9日発行)」と書かれている。身体の具体的なサイズが記されている貴重な資料であるが、彼は早くから自動車を使って活動をしていたことが推察される。娘の和子は、幼少の頃から父の自動車については記憶しているが、「百姓寺澤」の時代からトラックを使って市場に野菜類を運んでいたと彼女は推察する。他の輸送手段がなかったからである。彼はいち早く自動車を入手し、鉄道だけでは回りきれないようなアイダホやワイオミングなど広範囲な「山中部」での「営業活動」に利用していたことは間違いない。

このように「英語力」と「機動力」、それに新聞および印刷物による「広報力」をあわせた広義での「コミュニケーション能力」を身につけるこ

とによって、日本人コミュニティ内外と活発に交流し、彼の政治家への野心を実現しようとしていたことは十分に推察可能である。

この小論では、あくまで実験的なレベルで、『ユタ日報』創設者の寺澤畊夫「個人」というフィールドに焦点を絞って探求を進めたが、そのプロセスで、日系コミュニティという「集団」およびそれを取り巻くホスト「社会」との関係も見えてきた。今回の作業では歴史上の事実である「点」をいくつか発見し、それを結ぶ「線」を推察したに過ぎない。「歴史的現実を再構成」するまでには至らないけれども、ライフヒストリー的アプローチが社会学的考察にとって有効な手がかりを提供する可能性を示した。(以上)

#### 参考文献

- 河西宏祐編 (1992) 『戦後史とライフヒストリー: 千葉大学教養部の教育実践記録』 日本評論社 pp. 9-10.
- 倉田和四生・山本剛郎訳編 (2000) 『アメリカンライフにおける同化理論の諸相』 晃洋書房
- 塩湖仏教会 (1962) 「慶讃新築落成創立五十周年先亡者追悼感謝法要」(冊子)
- 谷富夫編 (1996) 『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』 世界思想社 pp. iii-iv.
- 寺澤忠次郎 (1912) 『垂米利加土産』 心身革新学院
- 中野卓 (1981) 「ライフ・ヒストリーによる人間研究」 『私の履歴書-経済人』 別巻、日本経済新聞社: pp. 50-56.
- 中野卓・桜井厚編 (1995) 『ライフヒストリーの社会学』 弘文堂
- 東元春夫 (1984b) 「移民新聞と同化-『ユタ日報』の事例を中心に」(田村紀雄と共著) 『東京経学会誌』 第138号 pp. 183-218.
- 東元春夫 (1994) 「ソルトレークシティ-日本人町の消滅-社会学的一考察-」 『芦屋大学論叢』 創立30周年記念号II pp. 1-24.
- 東元春夫 (1995a) 「戦時強制収容と構造的同化についての一考察-日系アメリカ人の調査から-」 『立命館言語文化研究』 第6巻4号 pp. 47-66.

- 東元春夫 (1995b) 「1916年のユタ州日系コミュニティ-『ユタ日報』と『絡機時報』の紙面より-」 『比較生活文化研究』 第5・6合併号 pp. 1-11.
- 東元春夫 (1996) 「在米日系人のインターマリッジ-ユタ州での調査から-」 『移民研究年報』 第2号 pp. 65-88.
- 山中速人、山田晴通、ピーター・ロス (2000) 「ハワイ・カウアイ島サトウキビ・プランテーションにおける日系人二世のライフヒストリー調査報告 (CD-ROM 解説)」 『コミュニケーション科学』 第12号 東京経済大学コミュニケーション学会 pp. 73-91.
- 『ユタ日報』 1939年4月24日、同年5月10日.
- 絡機時報 (1924) 『山中部と日本人』 p. 542.

- Bahr, Howard M.; Chadwick, Bruce A.; and Stauss, Joseph H. (1979) *American Ethnicity*. Lexington, MA.: D.C. Heath and Co.
- Carr, Stephen L. (1972) *The Historical Guide to Utah Goast Towns*. Western Epics, Salt Lake City, Utah. U.S.A.
- Gordon, Milton M. (1964) *Assimilation in American Life*. Oxford University Press.
- Higashimoto, Haruo. (1984a) *Assimilational Factors Related to the Functioning of the Immigrant*

Press in Selected Japanese Communities. Ph.D.  
Dissertation, Brigham Young University, Provo,  
Utah, U.S.A.  
Janowitz, Morris. (1967) *The Community Press in  
Urban Setting: The Social Elements of Urbanism.*

2nd Ed. Chicago: University of Chicago Press.  
Salt Lake Buddhist Church.(1987) *SALT LAKE  
BUDDHIST TEMPLE 75TH ANNIVERSARY:  
NOVEMBER 14, 1987* (booklet)